心ふれあう おかやまのちょっといい話 シリーズ㉕

※チラシは偶数月の第一日曜日に皆様におとどけしています。
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

パジャマの戦士、国体へ

先日、初めて国民体育大会の応援にかけつけました。なぜならわが子が選手として出場していたからです。娘が大好きだった今は亡き祖父の故郷が舞台ということもありますし、当時、大学4年生だった娘のサッカー人生の花道を見届けたくて出向きました。

振り返れば23年前、娘は先天性の心臓病をもって生まれてきました。娘の心臓に欠陥があると知らされたのは退院する前日のこと。異常に気付かなければ突然死をしていても不思議ではなかったそうです。すぐに手術の必要があると告げられると同時に大学病院への転院を勧められ、生後10日目に最初の手術を受けました。約1か月後に退院してからは次の手術に備え、体に負担がかからないように飲食や体重増加などに細心の注意を払い、最小量の水分しか与えない、料理はほとんど味気のないものというような生活を徹底していました。

医師からは幾度となく「将来は頭を使う職業がよいでしょう」と言われました。私はその言葉を素直に受け入れましたが、心臓病だからと甘えるような人になってほしくなかったし、周囲からも同情などで甘やかされたくなかった。

宝物のように大切に育てながらも躾などは厳しくし、娘が望むことは、すべてさせてきたつもりです。親の思いとは裏腹に体を動かすことが大好きで、幼い頃は3歳違いの弟と朝から晩まで外遊び。学校に通い始めてからは水泳、バレーボール、テニスなどもかじりました。小学4年生でサッカーを始め、5年生でトレセンのテスト生に選ばれたのも昨日のことのようです。

進路選択では女子サッカー部がある大学のみを受験。念願かなって体育会系のサッカー部に所属し、骨折しようと、肉離れをしようと、部活を休まなかったように思います。練習に参加できなくても、試合に出られなくても、グランドに足を運び、声援を送ったり、ボールを磨いたりしていたようです。

そんな娘に舞い込んだ国体への出場は4年間、がんばったご褒美だったと思います。順調に勝ち進み、決勝は雨の中でした。ポジションはFW。途中出場でしたが、本人にとっても、家族にとっても、これ以上の花道はなかったと感慨無量です。

私は親として、字のごとく木の上で見守るだけ、祈るだけでした。何より娘が頑張ってくれました。入退院を繰り返していた頃からは想像できないくらい強く逞しく優しく育ってくれました。笑うことすらつらそうな弱々しかった娘が、国体選手としてピッチに立てたのは、数限りない方々の支えがあってのこと。おかげさまに感謝してやみません。

希望は、人を成功に導きます。 ヘレン・ケラー

どんな時も、そこに希望がなければ、何事も成就するものではありません、逆に希望があればどんな困難にも打ち勝てるのだと思い毎日を過ごしたいですね。

あなたの町のアーバンホール
葬儀・法要・ギフト アーバンホール

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしています。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。
◆応募先／アーバンホール『ちょっといい話』係　〒710-0841 倉敷市堀南805-1◆記入事項／①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度（原稿用紙・ワープロいずれも可）にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。